

論文要旨

日本人教員の不適切行動に関する考察
-帰属理論に基づく留学生と日本人教員による認識の比較-

第1章 研究背景

第1章では、まず研究背景として日本語教育における日本語教育機関、留学生、および日本語教師の現状を明らかにした上で、本論における研究課題を提示した。

まず、日本の教育機関では留学生の受け入れは近年急速に進んでおり、第二言語としての日本語教育を提供する教育機関、いわゆる日本語学校は増加傾向にあること、現在以前よりも多様な国籍や文化背景を持つ留学生が日本語学校で学ぶようになってきていることを示した。このような状況において、文部科学省による指針では日本語教員に求められる資質・能力の1つに「言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力を有していること」が挙げられており、日本語教師の資質としてコミュニケーション能力が求められていることを明らかにした。

しかし、教員に必要とされる実践的なコミュニケーション能力とは何を指し、どのような言動がふさわしいとされるのか明確ではない。日本語学校には多くの国の学生が集まっており、学習目的や意欲だけでなく、価値観や教育に対する期待、理想とする教師像も異なることが予想される。その根拠として、Hofstade (1986) が4つの文化的指標に基づき分析した理想の教師像の違いや、儒教思想が根付く東アジア文化圏の教育観を挙げている。そのため、日本人教員と留学

生双方のコミュニケーションを円滑に進め、学習者にとって効果的な日本語教育を提供するために、教員の行動の「適切さ」や「正しさ」について両者の声を調査し、検証することが重要である。

また日本語教育分野における研究からも、日本語教師の行動の「適切さ」や「正しさ」の認識を検証することの必要性は明らかであることを述べた。日本語教師の資質は「人間性」「専門性」、教員が自らの行動を内省し改善していく力である「自己教育力」の三つの要素からなると考えられており、特に近年は自己教育力の重要性がますます認識されつつある。つまり、教員は自らのコミュニケーション行動を常に振り返りつつ改善を図ることが重要である。したがって教員の行動に関して教員と留学生の認識を明らかにすることは、自己の行動を振り返る上での足がかりとなり、自己教育力の向上へつながると考えられる。

したがって本論では、日本人の日本語教員と留学生双方に調査を行い、留学生が日本語学習を進めるにあたって重要な日本人教員の役割や行動について考察を深めるものである。

第2章 教員の不適切行動 (teacher misbehaviors)

第2章では、従来アメリカを中心に研究されてきた教員による不適切行動 (teacher misbehaviors) に焦点を当て、その定義、学生に与えるさまざまな影響や、いくつかの国や地域における不適切行動研究について先行研究を概観し、本研究の調査を行う上での疑問点を提示した。

Kearneyら(1991)によれば、教員の不適切行動とは、教室での指導や学生の学びを妨げる教員の行動とされ、従来の研究では学生の学習意欲や教員への信頼感、学生の学習の情意面や認知面などをも低下させることが分かっている。このような不適切行動は大きく「能力不足」「怠慢」「攻撃的な態度」の三つに分類されて研究され、いくつかの国で比較調査も行われてきた。ただし、そのほとんどはアメリカの大学生を対象に行われたものであり、数少ない国際的な比較研究においても、教員の不適切行動に対する認識やその影響については文化によって異なることが示され、日本人教員や日本語学校におけるさまざまな地域の留学生が日本人教員の行動をどのように認識するのか未だ明らかではない。

第3章 本研究の意義

第3章では、従来の研究によって示されてきた不適切行動と、学習に関する他のさまざまな要因との関係を取り上げ、教員の不適切行動についての留学生と日本人教員の認識を明らかにする実践的意義を示した。

第一に、学生が教員の不適切行動を認識し、その行動の理由が教員にあると考えた場合、学生による破壊的な反抗行動 (student resistance) が強まることが分かっている。第二に、教員の不適切行動は学生の学習意欲にも影響を及ぼし、意欲を減退させることが示されている。これらの研究は、教員の不適切行動を検証することは、学生と教員の双方にとってのより良い学習環境作りにつながることを示している。

第4章 帰属理論

具体的な教員の不適切行動には絶対的な基準や定義があるわけではなく、学生の認識によって定められるものである。また、他社の不愉快な行動の原因が内的な要因によるものだと考えると、より批判的になりやすいとされている。したがって学生が教員の行動をどのように理由づけするのかを明らかにすることは、教員の不適切行動を把握するためには不可欠である。そのため本研究では帰属理論 (Attribution Theory) を枠組みとして、学生や教員が教員の不適切行動をどのように理由づけ (attribute) するのかを明らかにしたい。そこで第4章では帰属理論の概要、利己的バイアスの存在を述べた上で、理由づけに関して見られる文化的差異を提示した。

第5章 調査

第5章では、まずここまでに導かれた次の4つの疑問に対する答えを得るための具体的調査手法を述べた。

- RQ1 日本語学校における留学生は、日本人教員のどのような行動を不適切行動だと認識するのか。
- RQ2 日本語学校における日本人教員は、どのような教員の行動を不適切行動だと認識するのか。

RQ3 RQ1 で挙げられた教員の不適切行動のうち、留学生はどの行動を内的要因に理由づけするのか。

RQ4 RQ1 で挙げられた教員の不適切行動のうち、日本人教員はどの行動を内的要因に理由づけするのか。

調査はまず日本人教員のどのような行動が不適切行動だと認識されるのか、留学生 167 名と日本人学生 98 名に対して自由記述式のアンケートを行い、回答を収集した。アンケートから得られた回答はグラウンデッドセオリーに基づき、「指導技術の不足」「学校・日本のルール」など 32 のカテゴリーに分類した。次に、それらの不適切行動にもとに日本人教員 10 名と留学生 19 名にインタビューと対面調査を行い、それぞれの不適切行動にどのような理由づけを行うのか、なぜ不適切だと感じるかどうか具体的な回答を得た。

第 6 章 調査結果

第 6 章では、日本人教員 10 名と留学生 19 名それぞれに対して行ったインタビューと対面調査の回答例を示しつつ結果を整理した。

最も重要だと考えられるのは、日本人教員と留学生で問題意識が向けられる不適切行動に差があった点である。日本人教員のほうが不適切だと考え、より問題意識が高かったのは「授業内容からの逸脱」「指導技術の不足」などの指導スキルに関わる項目が主であった。それに対して、留学生のほうが不適切だと考える割合が多く、問題意識がより高かったのは、「忍耐強さが足りない」「見下した態度」など教師の性質面を多く含んだ項目であった。

次に日本人教員と留学生の双方で不適切行動ではないとの認識で一致したのは「学校・日本のルール」「課題・テストの量」「教師による理不尽なルール」の 3 つであったが、留学生の一部からはそれらには精神的圧迫感を感じ、学習意欲を削がれるとする声も上がった。

理由づけに関しては、全体として教員の不適切行動に関しては留学生の方が内的理由への理由づけが多いことが明らかとなり、利己的バイアスが生じていることが示された。中でも留学生が内的理由に理由づけする傾向が高かったのは、教員のスキルよりも「不愉快な言い方や冗談」「子供扱い」などの性質そのものに関わる項目であった。

ただし、教員の外的理由づけの中には、ただ状況や学生に責任があると考えているのではなく、日頃その不適切行動を取らないように注意しているため、もしその行動をとったとすれば偶然であるといった理由づけがあり、一概に自己を守るための外的理由づけとは言いにくいことも補足しておかなければならない。

第7章 考察

第7章では、まず今回の調査結果と従来の不適切行動研究と比較分析することによって、日本語学校で留学生が日本語を学ぶというコンテキストにおけるコミュニケーション上の潜在的な問題点を指摘した。

また、日本人教員の不適切行動についての日本人教員、留学生双方の理由づけを帰属理論に基づき分析することで、日本人教員の行動が留学生の学習意欲に与える影響を明らかにし、特に教員の性質面に関わる不適切行動の重要性を示した。さらに、教員が自らの意見や判断を述べる機会を留学生に与えないような状況を指す「子供扱い」という項目については、不確実性回避傾向、高コンテキスト社会という概念を用いて考察を行った。

章の最後では、本研究における制限や不足点を指摘した上で、今後の研究の方向性としては調査対象をさらに多くの日本語学校に拡大するほか、日本語学校という場に限らず、留学生が増えつつある大学や専門学校などの教育機関における日本人教員と留学生とのコミュニケーションに焦点を当て研究を行なう可能性について言及した。

第8章 結論

本研究は、変化していく日本語教育の場において教員に求められる「実践的なコミュニケーション能力」や、「理想的な教師像」が一体何を示しているのか、留学生と日本人教員への調査を通して考察を深めるものであった。

その中で最も重要な示唆の一つは、教員には専門性や指導技術を重視するだけでなく、言葉を教えるからこそ「人間性」がより重視されるべきであるという点である。それは非常に抽象的で捉えどころのない概念のように思われる。しかし、本研究で明らかになった留学生にとっての具体的な不適切行動やその理由づけが、教員がコミュニケーション行動を振り返り、自己教育力の向上を図る

上での有効な手段となりうることを述べ、指導スキルやテクニックばかりにと
られることのない教員のコミュニケーションの重要性を指摘し結論とした。